

RI理事として向笠RI会長を支え、奨学事業の推進と米山学友会の設立に尽力。 地元福岡の音楽・芸術の振興と文化の向上に努め、多くの人々に慕われた。



第2700地区

末永 直行(福岡西RC)

Suenaga Naoyuki

1923年生 2019年没

1959入会 [洋楽SA]

G年度 1970-71

RI理事年度 1982-84

47歳で地区ガバナー、 59歳でRI理事

1959年に福岡西RCに入会した末永直行は、1970-71年度に47歳の若さで地区ガバナーを務め、1982年には、RI理事となった。

同じ年、RI会長に選出されたのは、中津RCの向笠廣次だった。世界的にも著名な精神科医であった向笠のRI会長としてのモットーは、「人類は一つ、世界中に友情の橋をかけよう」。かねてより向笠と親交があった末永は、向笠を理事として支え、退任後もRI会長指名委員などを歴任して、多大なる功績を残した。

一方、早くからロータリー米山記念奨学会の活動に携わり、1992年には3代目の理事長に就任した。任期は2001年までの10年間。この間1994年には、年間寄付額が20億円を超え、年間奨学生数も1,100人を超えて、日本最大級の民間奨学事業となった。

末永は、留学後のフォローアップを重視し、母国で活躍する元奨学生(学友)を訪ねてしばしば台湾や韓国へ赴いた。そして、世界規模での同窓会「米山学友会」の設立に力

を尽くした。日本語で例会を行う台北東海RCは米山学友が中心となって運営されているクラブだが、末永との縁で、福岡西RCの友好クラブになっている。

「ロータリアンが、米山奨学事業という畑に種を撒き、今は、花が咲き誇っているね」と嬉しそうに語る末永。理事長を退任し名誉理事長になってからも、末永を訪ねる学友は後を絶たない。

私財を投じて芸術文化を振興

末永の祖父 寿氏は、長崎県五島から福岡に移り、運送業で財を成した。父の敏毅氏は医業に従事した。末永家は、邸内に教会を建て、宣教師を招き、ピアノを囲んで讃美歌を歌うといった家庭だった。1923年に生まれた末永に、祖父の寿氏は、「財を増やそうと思うな、世のために使え」と教えたという。

末永は、大学を卒業すると、「かしわめし」で知られる駅弁製造販売業「寿軒」で事業にあたった。その一方で、1950年頃からは、福岡市音楽愛好会を主宰したり、新人音楽家発掘のためのコンクールを開催したりと、音楽の普及と振興にも取り組んだ。1957年には、ピアニストである博子夫人と共に福岡音楽院を開学し、斎藤秀雄氏をはじめとする著名な教育者を講師に迎えて、高度な音楽教育を展開するようになる。こうした活動を通しての、目覚ましい音楽文化向上への貢献が評価され、1962年、「西日本文化賞」を、夫妻が各々単独で受賞した。

1987年、末永は、「地域に音楽と文化、芸術を」をモットーに掲げ、「公益財団法人末永文化振興財団」を設立。末永家に受け継がれてきた福岡市七隈の7千坪の敷地内に、立派な音楽ホールを有する「末永文化センター」を創設した。これは、「練習場が欲しい」という九州交響楽団(九響)の要請に応えたもの

で、当時は、専用の練習場を持つ楽団はNHK交響楽団くらいしかなく、非常に珍しいことだった。同財団は、1992年にメセナ特別賞を受賞している。

専用練習場を得た九響は、団員の切磋琢磨により一流の交響楽団に成長する一方、小学生を招いて音楽教室を開催したり、団員有志がワンコインで楽しめる「末永の森コンサート」を開催したりと、地域の人々に音楽や芸術を身近に感じてもらえる機会も提供している。

なお、1994年には、郷土の洋画家織田廣喜画伯の作品を常設する「ミュゼ オダ」を私財を投じて建設。その後、「福岡YMCA本館」も建てられ、「末永の森」一帯は福岡の文化の発信地のひとつとなっている。



末永文化センター 九州交響楽団の演奏

民間レベルでの国際交流を推進

末永は国際感覚にも優れていた。とりわけフランスとの交流は深く、福岡日仏協会会長や福岡仏共和国名誉領事を永年勤めた。毎年「福岡パリ祭」を開催し、駐日仏国大使を迎えて市民レベルでの交流を促した。1982年に締結されたボルドー市と福岡市の姉妹都市提携では、橋渡し役を担った。シラク大統領が来日した際には、「福岡空港での出迎えの先頭は、末永氏に」とのリクエストがあったという。

末永の永年の功績に対して、フランスから、最高勲章であるレジオンドヌールをはじめとする4つの勲章が授与されている。

廣畑 富雄(福岡西RC)